

交換と貨幣の起源(2)



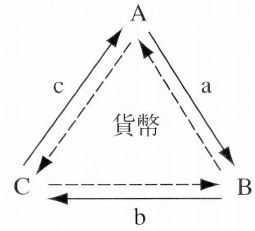
Silver denarius showing Juno Moneta Rome, 46 BC
The origins of the word 'money'

This coin shows an image of Juno Moneta on the front; her name is written vertically on the left. On the back of the coin are depicted tools associated with metalworking: in the centre an anvil, on the left a pair of tongs and on the right a hammer. Above the anvil is an uncertain object decorated with a wreath. It may be the smith's cap worn by Vulcan, the Roman god of fire and metalworking. Alternatively, the tools shown may be those of an ancient Roman coin-maker, if we interpret the 'cap' as an upper die (打ち型) about to be struck by the hammer onto a blank held by the tongs. The coin was made by the moneyer Titus Caristus.
A.M. Burnett, *Coinage in the Roman world* (London, Seaby, 1987)
http://www.britishmuseum.org/explore/highlights/highlight_objects/cm/s/silver_denarius_juno_moneta.aspx

「交換と貨幣の起源(1)」は、<http://hdl.handle.net/2241/120308>

不便な物々交換から便利な貨幣へ？

物々交換の不便さ: BがAの持つaを欲しくても、AはBの持つbを欲しいとは限らない(たとえば、Aはc、Cはbを欲する) = 欲求の「二重の一致」の困難 (Jevons 1875 *Money and the mechanism of exchange*)



みんなが欲しいがる物 = 貨幣
貨幣があれば、上例の場合でも交換が可能になる(右上図)

貨幣があれば、上例のように便利なので、物々交換に代わって貨幣が使われるようになった

...という起源論は怪しい

サービスと貨幣

霊長類の食物分配(=人間の経済の源)で、食物の対価となるのは、性行為、毛づくろいや共同作業への参加といったサービス

サービスは自分の身体しか持っていない者でも働けば提供できる→貨幣がなくてもサービスが通貨(交換手段)になる

今でも、たとえばレストランで食事をして代金を払えない場合、皿洗いなどの労働で支払う

「二重の一致」はサービスによって実現されるのなら、貨幣は不要? 物々交換ができないなら、欲しい財を得るために、それを持っている人が喜ぶサービスを提供すればよいし、サービス経済はチンパンジーでもかなり発達(De Waal 1997 "The chimpanzee's service economy: Food for grooming")

貨幣の起源は物々交換の不便さという虚構以外のところに求めるべき

人類(ヒト族 *Hominini*) の互恵的交換は、かつてはチンパンジーのように、同じ群れないし共同体の成員内に限定

貨幣的交換は複数の共同体の間でまず発達→

やがて分与された食物の返礼や、共同体内部における他の互恵的關係にまで徐々に貨幣が使われるようになり、共同体は貨幣によって変質させられてきた(貨幣経済がサービス経済を浸食=労働に賃金を払うなどサービスと貨幣の交換)

とすれば、**共同体の間を移動するもの**が、貨幣の起源を解く鍵を握っているはず!

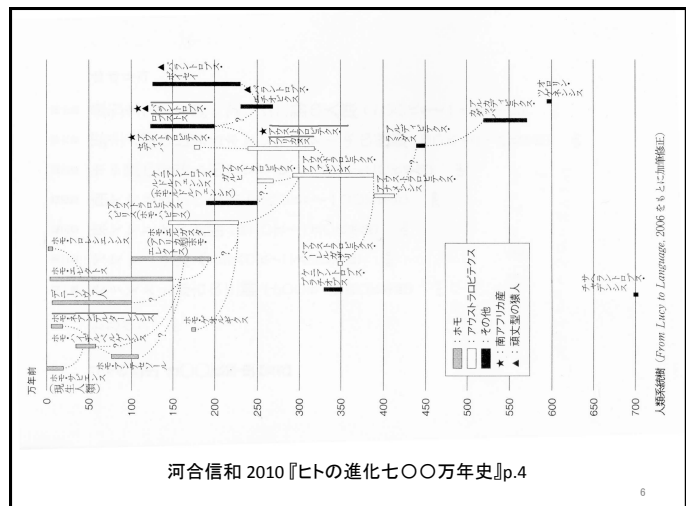
「交換と貨幣の起源(1)」スライド7の③近親姦incest回避のために、両性の一方が生まれた共同体から他の共同体に移籍して生殖することが多い

雄が移動=母系社会(シカ、群れを形成するmonkeyの多く)

女性と貨幣

人間=ホモ・サピエンスと最も近い現存種のチンパンジー・ボノボ(「交換と貨幣の起源(1)」スライド10の系統樹を参照)も、初期人類アウストラロピテクス・アフリカヌスやパラントロプス・ロブストス、人間に最も近いネアンデルタール人も、女性が移動する父系(父方居住)社会 (Copeland et al. 2011 "Strontium isotope evidence for landscape use by early hominins" Lalueza-Fox et al. 2011 "Genetic evidence for patrilocality among Neandertal groups")

→チンパンジー、ボノボ、ヒト族は共通祖先以来父系社会で、初期ホモ・サピエンスも父系社会を継承
→未開社会の多くは父系社会



河合信和 2010 『ヒトの進化七〇〇万年史』p.4

チンパンジーの貨幣使用

多摩動物公園での実験：2000年7月に自動販売機を設置し、コインを渡すことをはじめ。1人が自動販売機にコインをいれてジュースを得る。2008年9月までに11人できるように

2001年7月に、空き缶を入れるとコインが出てくる空き缶回収機も設置 すぐに利用すると予想していたが→2008年9月22日、「ミル」(メス、5歳)が「空き缶回収機」投入口に缶を入れ、出てきたコインを手に、すぐに自販機でジュースを購入

http://www.tokyo-zoo.net/topic/topics_detail?kind=news&link_num=10232 (34秒の動画あり)

2009年7月までに、利用できるのは4人に

https://www.tokyo-zoo.net/topic/topics_detail?kind=news&link_num=12113

チンパンジーは人間や人間が作ったものなら貨幣的交換や言語コミュニケーションをできるが、自分たちだけで貨幣や言語をつかってやりとりできるわけではない。

7

チンパンジーやボノボと比べて人間の女性の役割の特色は、嫁入り後も実家との関係を保ち、婚家やその属する集団と実家やその属する集団との間を媒介するという点であろう。

ネアンデルタール人：長距離交易(集団間取引の連鎖)を行わず、ホモ・サピエンスより寿命が短いため、祖父母と孫の関係が弱い(Caspari & Lee 2004 “Older age becomes common late in human evolution”) → 集団間媒介という女性の役割は、ホモ・サピエンスが登場してはじめて顕著になったと思われる。女性が婚出して産んだの子への、外祖父母や外オジの関係が重要に(天皇と摂政関白もその例)

8

長距離交易と、女性の象徴としての貨幣

13万年前ころに長距離交易開始：穿孔した小巻貝(*Nassarius gibbosulus*)のビーズ(最古の装身具)が運ばれ、海岸から遠く離れた内陸でも出土 (Vanhaerene et al. 2006 “Middle paleolithic shell beads in Israel and Algeria”)

小巻貝は子宮に擬えられ、穿孔は性交ないし出産を比喻。それを運び、交換することは父系社会における女性の移住・結婚を象徴

小巻貝は共同体 A_1 から A_2 へ、 A_2 から A_3 へ、……、 A_{n-1} から A_n へと順次移動し、遠く離れたところまで運ばれた。

その移動と逆方向に、対価として何らかの財・サービスが渡されていたはずなので、小巻貝ビーズは女性を象徴する交換手段として使われていた。

小巻貝は数を算えやすく(価値尺度)、保存もできる(価値保蔵手段)

価値尺度・交換手段・価値保蔵手段の3機能を備える小巻貝ビーズは、貨幣そのもの

9

古代中国：女性器に似た形の寶貝(子安貝)の貝殻が、穴を開けられて貨幣として使われる。

寶(宝)、貨、資、財、貸、貯、賣(売)、買、販、貿、賞(掛売買)、賃、負、債、責、質、賠、貢、賢(豊かで人に分け与える)、貧、貧など、貨幣経済に関わる意味のある漢字の多くが寶貝の象形文字「貝」を部首としている。



上 寶貝の原貝貨
下左 石製模倣貝貨 下右 青銅製模倣貝貨
(しらかわただひこ氏コレクション『コインの散歩道』
<http://homepage3.nifty.com/~sirakawa/Coin/C001.htm>)
: *Nassarius gibbosulus* shell beads (Vanhaerene et al. 2006, p.1786)

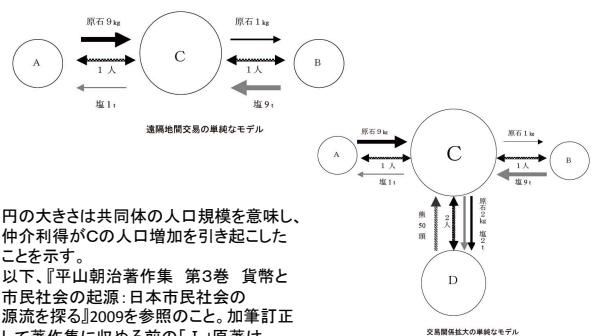
10

“money” “mint”の語源はローマの女神ユノー・モネータ Juno Moneta。その神殿に造幣局(スライド1)

この女神の祭りである3月1日のマートローナーリア(Matronalia)は、ローマ人によるサビニ女性略奪に起因する戦争が、ローマ人と結婚して子供を産んでいたサビニ女性たちの仲介で終わり、ローマ人とサビニ人が一つの国を作ってロムルスとサビニ王ティトゥス・タティウスが共にローマを治めることになったという伝説における和平の記念日で、タティウスの住居跡がモネータ神殿になったとされている。この伝説によれば、モネータはローマとサビニを和解・統合へと導いたサビニ女性たちを神格化した存在であり、共同体間媒介の象徴であるモネータが“money”の語源となった。

11

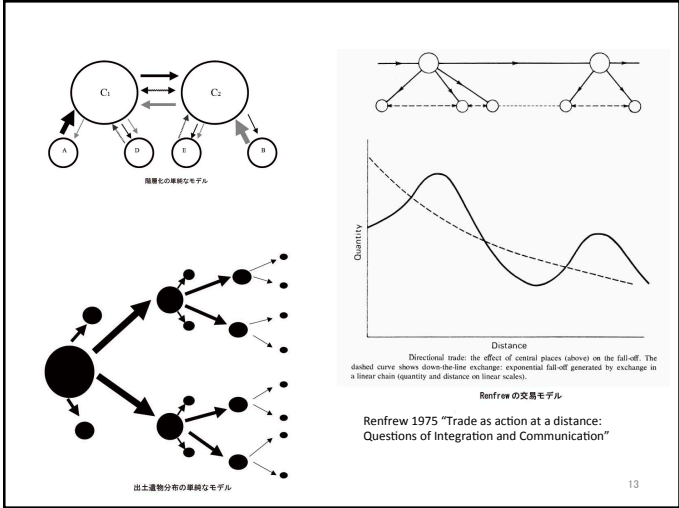
遠距離交易における貨幣進化



円の大きさは共同体の人口規模を意味し、仲介利得がCの人口増加を引き起こしたことを示す。

以下、『平山朝治著作集 第3巻 貨幣と市民社会の起源：日本市民社会の源流を探る』2009を参照のこと。加筆訂正して著作集に収める前の「I」原著は、
<http://hdl.handle.net/2241/100800>

12



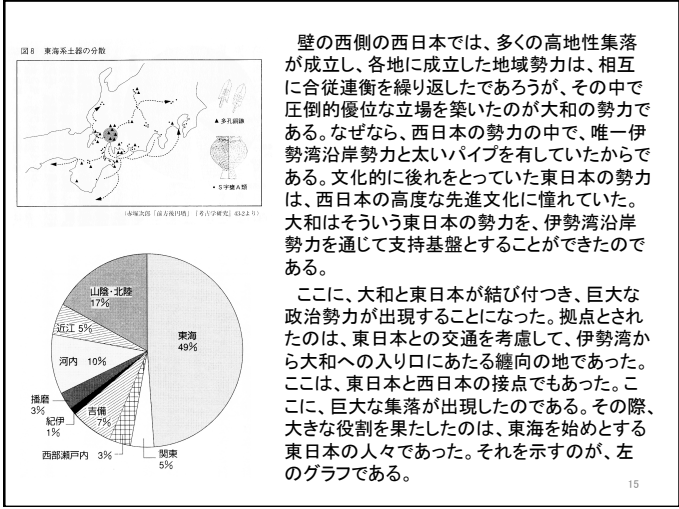
大和朝廷の出現と貨幣

このように、産地の限られた財を集積し、そこを介して周辺各地に流通させなければならないような、交通の要衝に、多数の人口を擁する都市が形成され、そこを中心に貨幣経済が誕生したと思われる。

前スライドの左上図のC1を奈良盆地ないし京阪平野の中核都市、C2を濃尾平野の中核都市とみなせば、奈良(大和)盆地に大和朝廷が出現して日本を創ったり、尾張の信長がいち早く上京して台頭し、その後を継いだ秀吉が天下統一したこともよくわかる。大和朝廷については、大山誠一による以下の説明が秀逸。

弥生後期の東日本の情勢であるが、伊勢湾北部の尾張を中心とする東海系の土器が、北陸・東山・東海の東日本全体に広がっているという(次スライド左上図)。このことは、壁*の東側にありながら、西日本とも密接な交流を持つ伊勢湾北部の勢力が、東日本全体の交流の中心となったことを意味する。

* 東日本と西日本は険しい山に隔られているので、陸上交通は限られた要衝を通るしかなく、古代には、不破関(美濃国 関ヶ原)、鈴鹿関(伊勢国)、愛発関(越前国)の三関が畿内防衛のために置かれていた。(平山注)

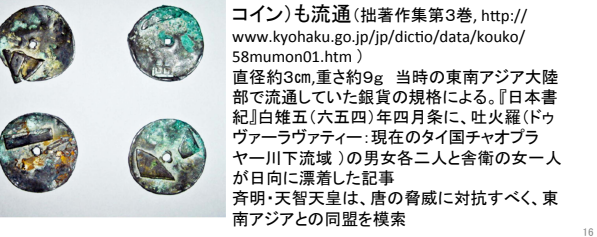


壁の西側の西日本では、多くの高地性集落が成立し、各地に成立した地域勢力は、相互に合従連衡を繰り返したであろうが、その中で圧倒的優位な立場を築いたのが大和の勢力である。なぜなら、西日本の勢力の中で、唯一伊勢湾沿岸勢力と太いパイプを有していたからである。文化的に後れをとっていた東日本の勢力は、西日本の高度な先進文化に憧れていた。大和はそういう東日本の勢力を、伊勢湾沿岸勢力を通じて支持基盤とすることができたのである。

ここに、大和と東日本が結びつき、巨大な政治勢力が出現することになった。拠点とされたのは、東日本との交通を考慮して、伊勢湾から大和への入り口にあたる纏向の地であった。ここは、東日本と西日本の接点でもあった。ここに、巨大な集落が出現したのである。その際、大きな役割を果たしたのは、東海を始めとする東日本の人々であった。それを示すのが、左のグラフである。

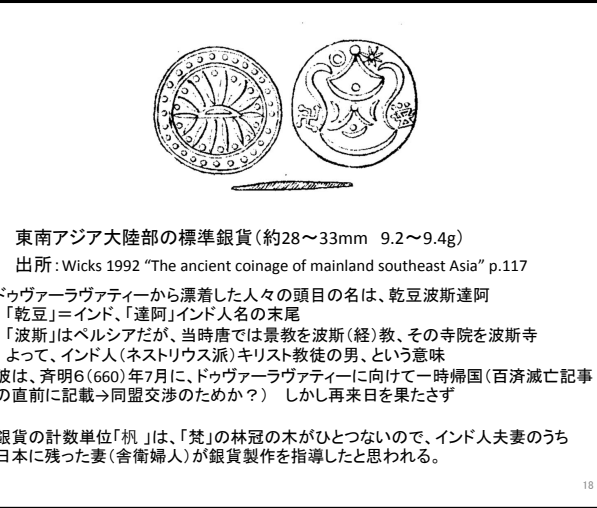
これは、大和盆地以外から纏向遺跡に持ち込まれた搬入土器の割合である。東海と関東で過半を占め、さらに近江・北陸・山陰も無視できない。この搬入土器は、纏向出土の土器の一五%に達するという。土器は壊れやすいものであるから、移動中の廃棄を考えると驚異的な数字である。特に、遠い関東の土器の存在に驚かされる。どうやって運んだのかと思う。ともかく、こうして纏向に集まった人々は、労働力ともなり、必要に応じて軍事力を伴ったことだろう。当然ながら、ここに、巨大な権力が生まれる。

(大山誠一2001『聖徳太子と日本人』pp.228~230)

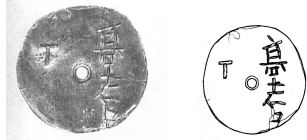


遺物名	出土地	年代	数量	特徴	備考
金貨
銀貨
銅貨
鉄貨
...

今村啓爾『富本銭と謎の銀銭』2001 表1



「タカラ・シ・巳(?)丁」刻銘入り帆銀貨



京都府小倉町別当町遺跡出土 直径31.5mm 9.5g
出所:長戸・百瀬・磯部1996「小倉町別当町遺跡の『高志』銘無文銀銭」143頁

高=タカラ(宝皇女=斉明天皇)
志は死と同音
巳丁=斉明崩御日干支

C刻印が2つあるもの多く(スライド16写真右下、22十字の裏など)、乳房を表すとすれば、中心穴とC二つで女性(具体的には斉明)を象徴
乳房は乳児の換喩ならば、母と2人の子(斉明と天智・天武)

19

MTT(マリア・テレジア・1ターレル銀貨)とコーヒー豆



この女王の像を刻んだ銀貨が、不思議なことに、東アフリカとアラビア半島の一部で異常な人気を呼びました。「人気」という言葉はふさわしくないかもしれませんが、その実質的な価値以上の価値をもって取引されたのです。

エチオピアの西部にあるカファ地方は、コーヒーの語源にもなったところですが、コーヒーを買うためには、他のどんな貨幣でも受け入れられず、マリア・テレジアの銀貨だけが使われたのです。何と200年近くもです。もともと、この銀貨はオスマントルコなどの東方(レヴァント)との貿易を目的に発行されたもので、「レヴァント・ターレル」と呼ばれていました。しかし、これほどの銀貨そのものに人気が集まることは予想外のことでした。

この現象はマリア・テレジアの在位中からみられたことですが、彼女の没後もこの銀貨以外は通用しないです。オーストリア政府は、彼女の没後も、最後の年「1780年銘のマリア・テレジア銀貨」を発行し続けました。

なぜ? かの大経済学者ケインズも悩んだそうです。

品質が特に良かったのでしょうか? いいえ、この銀貨の製造と輸送にかかる費用は、1ポンド=14枚でした。ところが、現地では、1ポンド=10~13枚で取引されたのです。

特定の民族の好みだったのでしょうか? いいえ、この地方の住人はキリスト教徒(正教)、イスラム教徒が中心でしたし、コーヒーの仲買商人は、インド人やユダヤ人でした。特定の民族の嗜好とはいえません。ましてイスラム教徒は偶像が天敵いなはずで。

20

聖母双子(マリア・イエス・トマス)と 斉明・天智・天武



大阪市天王寺区真宝院出土 国立歴史民俗博物館蔵
(資料番号H-242-29-3-1)

http://www.rekihaku.ac.jp/up-cgi/login.pl?p=param/syuz2/db_param

スライド19の銀貨側面にある線刻の「x」も十字(聖アンドレ十字)?

22

他に代替品がなかったのでしょうか? いいえ、イタリア政府やイギリス政府は何度か自国の通貨を使用させようとしたのですが、徒勞に終わりました。

(しらかわただひこ氏コレクション『コインの散歩道』<http://homepage3.nifty.com/~sirakawa/Coin/E015.htm> コーヒー豆写真は<http://ja.wikipedia.org/wiki/コーヒー豆>)

モルディブ産宝貝が近代アフリカでは奴隷貿易などに使われていた(Hogendorn & Johnson *The Shell Money of the Slave Trade: African studies series 49, 1986*)
MTTもヨーロッパからアラビア半島南端のアデンに運ばれてカファ地方のコーヒーに交換され、アフリカ大陸に入った。→衰退しつつあるオーストリアの通貨なのに、MTTは、地域によっては**大英帝国など列強の銀貨を駆逐する流通力**を誇った。

私の説:宝貝に似たコーヒー豆と引き換えに入ってくる、聖母マリアと同名のMTTは女性象徴としての性格がとりわけ強い。交換手段や護符としての需要が他の銀貨よりも多く、同じ地金価値の他の銀貨より高い価値を維持し続けた。アラビア人は偶像崇拜を公式には禁じられていたのに、隠れマリア崇拝的に好まれたのでは?

女性象徴銀貨は**赤字下線部**のように強大な権力・権威に支えられたライバル銀貨に優る流通力を誇り、斉明女帝を象徴する古代日本銀貨もそれによって成功→**天武は唐の開元通宝(銅銭)の規格によった富本銭を発行したが流通せず=専制君主の権力も中国文明の権威も及ばず**。和同開珎は、銅銭のまゝに銀銭が発行されたので成功

参考: During the Japanese occupation of Indonesia in World War II, **enough people preferred it to the money issued by the occupying forces** that the American Office of Strategic Services created counterfeit MTTs for use by resistance forces(http://en.wikipedia.org/wiki/Maria_Theresa_thaler, Lovell 1963 "Deadly Gadgets of the OSS"による)

21



インドのキリスト教徒は、インドに伝道した使徒・聖トマスをイエスの双子とし、聖母双子を崇拝した(『トマス行伝』)

それをドウヴァーラヴァティーから漂着したインド人夫妻がもたらし、斉明とその男子の中大兄皇子・大海人皇子に擬えて三尊像が信仰されたのでは?

善光寺本尊一光三尊像はその信仰の名残で、善光寺本堂は本来、十字型(次スライド)

左は善光寺御前立本尊(七年に一度開帳)

<http://www.gokaicho.com/gokaicho/>

23



十字型本堂の善光寺(1299年ごろ)
長野県編 1986『長野県史 通史編 第二巻 中世一』
長野県史刊行会、口絵
(聖戒編『一遍聖絵』京都市・歡喜光寺所蔵)

「善光寺旧址 或于石鳥居之西南隅四十歩許田間、土俗相伝謂、信州阿弥陀院旧在此地、後移彼、改名善光寺、又名百濟寺」『天王寺誌』
四天王寺北東の百濟尼寺は貨幣鑄造所: 舍衛婦人が銀貨を作ったことに由来するのでは?

24